

平成 23 年度

病害虫発生予報第 2 号

平成 23 年 5 月 26 日

三重県病害虫防除所

515-2316 三重県松阪市嬉野川北町 530

TEL 0598-42-6365 Fax 0598-42-7568

ホームページ <http://www.mate.pref.mie.lg.jp/boiyosyo/>

目 次

	ページ
1. 向こう 1 か月の予報と対策	1
2. 作物別の状況	2
3. 発生時期・発生量（平年比）の予察根拠	7
4. 予察項目の見方	12
5. 今月のトピックス（水稻のニカメイガについて）	13
6. 気象のデータ	14
7. おしらせ	16

1. 向こう 1 か月の予報と対策

1) 作物

イネでは、イネクロカメムシの発生量はやや多と予想されますので、例年発生が多い圃場では、被害状況に注意してください。イネミズゾウムシの発生時期はやや遅、発生量はやや多と予想されますので、発生状況に応じて防除を行ってください。葉いもちの発生時期は平年並、発生量は平年並と予想されます。

2) 果樹

カンキツでは、かいよう病（中晩柑）の発生量はやや多と予想されます。幼果への感染防止のため予防散布を実施してください。そうか病、黒点病、かいよう病（温州みかん）、ミカンハダニの発生量は平年並と予想されます。チャノキイロアザミウマの発生量はやや少と予想されます。

ナシでは、黒星病、ハダニ類の発生量は平年並と予想されます。

ブドウでは、べと病の発生量は平年並と予想されます。

果樹共通では、果樹カメムシ類の発生量は少と予想されます。

3) 茶

チャでは、炭疽病、もち病の発生は平年並、カンザワハダニ、チャノミドリヒメヨコバイの発生はやや少、チャノホソガ、チャノキイロアザミウマの発生は少と考えられます。

4) 野菜

イチゴでは、炭疽病の発生量は平年並、うどんこ病はやや少と予想されま

す。

ネギでは、ネギコガの発生量は平年並と予想されます。

野菜共通では、コナガの発生量はやや少と予想されます。

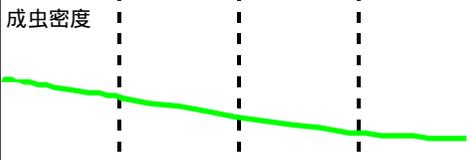
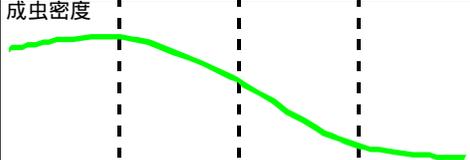
2. 作物別の状況

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
			平年比	程度		5月	6月			
		平年比	平年比	程度	平年比	下旬	上旬	中旬	下旬	
イネ	葉いもち	平年並	平年並	小	普通	置苗で発生 ↓		本田で発生 ↓		<ol style="list-style-type: none"> 補植用置き苗はいもち病の発生源となるので、すみやかに除去、枯死させてください。 本田粒剤による予防防除は、初発前に行ってください。 いもち病発生予測支援システム（プラスタム）において、感染好適条件の現れた7～10日後に初発が予測されます。 プラスタムの最新情報は病害虫防除所ホームページで随時更新しています。
	イネクロカメムシ	-	やや多	小	普通		成虫誘殺数 ↓		被害量 ↓	<ol style="list-style-type: none"> 前年発生の多かった圃場では、常発する傾向があるので、被害状況に注意してください。 薬剤防除する場合は、越冬成虫の発生量がピークとなる、6月下旬に散布してください。
	イネミズゾウムシ	やや遅	やや多	小	低		成虫誘殺数 ↓			<ol style="list-style-type: none"> 株当たり0.5頭以上の成虫が発生していれば、防除してください。
カンキツ	そうか病	-	平年並	小	普通	葉・枝 ↓		果実 ↓		<ol style="list-style-type: none"> 梅雨明けまで、幼果実に感染します。 6月以降は新芽や幼果の病斑から二次感染するので、発生している園地では、予防散布が重要です。
	黒点病	-	平年並	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 生理落果盛期～後期に予防散布を実施してください。 上記薬剤散布後、積算で200mm以上の降雨があったら、次の防除を実施してください。 枯枝が伝染源です。樹冠内や圃場内の枯枝を除去して下さい。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						5月	6月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
カンキツ	かいよう病	-	温州 平年並	温州 小	温州 普通	発病密度		1) 旧葉で越冬病斑が見られる圃場では、新葉や幼果での発病を防ぐため、感染を助長する降雨等の気象条件に注意し、ボルドー剤による予防防除を実施してください。 2) 越冬病斑が見られない圃場でも、本病に弱い品種（カラ、セミノールなど）では、幼果への感染防止対策として、予防散布を実施してください。 3) 中晩柑類では、梅雨期頃から 10 月中下旬頃まで、果実への感染が起こります。		
	ミカンハダニ	-	平年並	中	普通	雌ダニ密度		1) 梅雨期は薬剤散布のタイミングが取りにくいです。マシン油乳剤等を有効に利用する散布を計画して下さい。 2) ミカンハダニが増加する前に、散布ムラのないように十分に薬剤散布して下さい。 3) 同一系統薬剤使用は年 1 回としてください。		
	チャノキイロアザミウマ	-	やや少	小	普通	成虫密度		1) 例年被害の多い圃場では、6 月上旬～中旬に防除し、その後は 30 日間隔を目安に次回の防除を行ってください。		
ナシ	黒星病	-	平年並	小	普通	発病密度		1) 発病葉は発見次第取り除き、圃場外へ持ち出して処分してください。 2) 薬剤散布にあたっては、同一作用性を示す薬剤の連用を避けてください。		
	ハダニ類	-	平年並	小	普通	雌ダニ密度		1) 防除の目安は成虫の 1 葉当たり寄生虫数が 1 頭以上の時です。 2) 殺ダニ剤は抵抗性がつきやすいので、同一系統薬剤の使用は年 1 回としてください。		

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消の一例				防除の注意事項							
						5月	6月										
						下旬	上旬	中旬	下旬								
ブドウ	べと病	-	平年並	小	普通					1) 雨が続くと急激に発生が広がります。降雨が予想される時は、早めに予防散布を行ってください。 2) 葉裏をよく観察して、病斑を認めたら、直ちに防除を実施してください。 3) 被害葉、被害果穂は、発見次第取り除いて、圃場外に持ち出し処分してください。							
						果樹共通	カメムシ類	-	少		小	低					1) 圃場をよく観察して、初期の飛来を確認します。夜温が急に高くなると、活発に飛翔します。園地付近の街灯などでも飛来の兆候を観察してください。 2) ナシ等では飛来を確認したら防除を実施してください。
													チャ	炭疽病	-	平年並	
もち病	-	平年並	小	低						1) 風雨があると感染します。 2) 平均気温 15 ~ 20 で、多湿が続くと発生しやすくなります。 3) 萌芽期に防除しましょう。							
					カンザワハダニ	-	やや少	小	普通								1) 葉裏に寄生し、新葉が黄色くなり落葉しやすくなります。 2) 雌成虫で越冬します。 3) 発生密度が低い時点での防除が効果的です。 4) 抵抗性が発達しますので同一系統の薬剤の連用は避けましょう。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						5月	6月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
チャ	チャノホソガ	-	少	小	低	成虫密度		1) 蛹で越冬し、成虫となって飛来します。年間 6～7 世代発生します。 2) 新葉に産卵し、幼虫が三角巻葉をつくり食害します。 3) 卵～幼虫発生初期に薬剤防除しましょう。		
	チャノミドリヒメヨコバイ	-	やや少	小	普通	成虫密度		1) 雌成虫が越冬します。 2) 新芽を加害し先端から褐変し落葉することもあります。 3) 萌芽から新芽生育期に防除しましょう。		
	チャノキイロアザミウマ	-	少	小	低	成虫密度		1) 成虫で越冬し、新芽の葉裏に産卵し加害します。 2) 萌芽～開葉初期に防除しましょう。		
イチゴ	うどんこ病	-	やや少	中	普通	親株		1) 今後 1 か月は感染しやすい時期です。 2) 圃場をよく観察し、早期発見に努めてください。 3) 薬剤散布は、予防に重点をおいて行ってください。また、発病を確認したときは、病気が広がらないよう速やかに防除を行ってください。 3) 葉裏から発生しやすいので、薬液が葉裏までかかるよう丁寧に散布を行ってください。		
	炭疽病	-	平年並	中	普通	親株		1) 灌水時の水滴の跳ね返りによって病原菌が広がるため、跳ね返った水滴が茎葉に当たらないよう注意して灌水を行ってください(やさしく手灌水、チューブ灌水)。 2) 高温・多湿条件で発生しやすいため、今後の梅雨・高温期にかけては、降雨に注意しながら防除を徹底してください。 3) 薬剤散布は、株元まで十分かかるように行い、畝やベンチの両側からも散布してください。		

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						5月		6月		
						平年比	程度	下旬	上旬	
ネギ	ネギコガ	-	平年並	小	普通	成虫密度 				1) 幼虫が葉の内部に潜って食害するため、潜入防止のため早期防除が重要です。
野菜共通	コナガ	-	やや少	小	普通	成虫密度 				1) 近年、大きな被害は見られませんが、繁殖力が旺盛なアブラナ科野菜の重要害虫です。 2) 薬剤抵抗性の発達しやすい害虫なので、同一系統薬剤の連用を避けてください。

3. 発生時期・発生量（平年比）の予察根拠

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	葉いもち	平年並	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報（5月20日発表）によると、期間の後半は平年と同様に曇りや雨の日が多い予想（発生時期±）</p> <p>2) 巡回調査圃場（5月第2週）では、置き苗での発生率0%（5年平均0.3%）と平年並に少ない傾向（±）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並（概して平年並）（±）</p> <p>考察： 今後の気象要因から、予想発生時期は平年並、巡回調査結果および一般圃場の発生状況から、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	イネクロカメムシ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（松阪市・昨年8月第2半旬～10月第6半旬）では、誘殺数は水田位置178頭（平年51.0頭）と多、畑位置2228頭（平年2453.8頭）と平年並（+）</p> <p>2) 予察灯（松阪市・4月第1半旬～5月第3半旬）では、水田位置0頭（平年0.2頭）と平年並に少、畑位置0頭（平年3.7頭）と平年並に少（±）</p> <p>考察： 昨年の誘殺数から越冬成虫量はやや多と考えられるため、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	イネミズゾウムシ	やや遅	やや多	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（松阪市・4月第1半旬～5月第3半旬）では、越冬成虫の最盛日は5月11日（平年5月6日）とやや遅（発生時期+）</p> <p>2) 予察灯（松阪市・4月第1半旬～5月第3半旬）では、誘殺数は153頭（平年41.8頭）と多（+）</p> <p>3) 巡回調査圃場（5月第2週）では、被害株率34.4%（平年31.1%）と平年並、株当たり虫数0.06頭（平年0.05頭）とやや多（+）</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少～やや多（概して平年並）（±）</p> <p>考察： 予察灯の状況から、幼虫の予想発生時期はやや遅、予察灯、巡回調査圃場の状況を重視して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
カンキツ	そうか病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報（5月20日発表）によると、期間の後半は平年と同様に曇りや雨の日が多い予想（±）</p> <p>2) 県予察圃（5月中旬）では、新葉発病率31.5%（平年31.7%）、発病果率0%（平年0.5%）と平年並（±）</p> <p>3) 巡回調査圃場（5月第2週）では、病斑は未確認（平年旧葉発病度0.1）（±）</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少～平年並（概して平年並）（±）</p> <p>考察： 現状の発生は平年並に少なく、大きな増加の要因はなく、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	黒点病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(5月20日発表)によると、前半は天気为数日の周期で変わり、後半は平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(無防除圃)では、前年(10月下旬)の果実発病度は78.1(平年77.5)と平年並 (±)</p> <p>3) 感染源となる枯れ枝は平年並の状況 (±)</p> <p>考察: 平年と比べて大きな増減の要因はなく、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	かいよう病	-	温州 平年並 中晩柑 やや多	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(5月20日発表)によると、期間の後半は平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃における新葉での初発は、5月17日(平年5月13日)とやや遅い (-)</p> <p>3) 県予察圃(5月中旬)では、新葉発病率0%(平年1.9%、ただし6か年は0%)と平年並 (±)</p> <p>4) 巡回調査圃場(5月第2週)では、旧葉発病率は温州みかんでは0.9%(平年0.3%)とやや多、中晩柑では17.3%(平年6.4%)と多 (+)</p> <p>5) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察: 温州みかんでは、現状の発生は平年並と思われ、今後の増加を考慮しても、予想発生量は平年並と考えます。中晩柑類では、現状の発生はやや多と思われ、予想発生量は引き続きやや多と考えます。</p>
	ミカンハダニ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(5月20日発表)によると、期間の後半は平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(5月中旬)では、100葉当たり寄生虫数は、無防除区で16.7頭(平年31.3頭)と少(-)、防除区で0頭(平年1.3頭、ただし7か年は0頭)と平年並(±) (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(5月第2週)では、旧葉寄生率は14.3%(平年8.8%)と多(+)、寄生虫数は3.68頭/葉(平年0.62頭/葉)と多(+)、発生圃場率は38.5%(平年37.7%)と平年並(±) (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察: 現状の発生は圃場によりバラツキがありますが平年並と思われ、大きな増減の要因はなく、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノキイロアザミウマ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(5月20日発表)によると、期間の後半は平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(5月上旬)では、黄色粘着トラップへの誘殺数は0.14頭/日(平年0.27頭/日)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少~平年並(概してやや少) (-)</p> <p>考察: 現状の発生はやや少と思われ、大きな増減の要因はなく、予想発生量はやや少と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
ナシ	黒星病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(5月20日発表)によると、前半は天気が数日の周期で変わり、後半は平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(5月第2週)では、発病葉率0%(平年0.2%)と平年並 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察： 現状の発生は平年並に少と思われ、大きな増減の要因はなく、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	ハダニ類	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(5月20日発表)によると、期間の後半は平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(5月第2週)では、寄生葉率は0.2%(平年0.2%)、寄生虫数は0.002頭/葉(平年0.02頭/葉)と平年並 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察： 現状の発生は平年並に少なく、大きな増加の要因はなく、予想発生量は平年並と考えます。</p>
ブドウ	べと病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(5月20日発表)によると、期間の後半は平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(5月第2週)では、発病は未確認(平年発病葉率0%) (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察： 現状の発生は平年並に少ないと思われ、大きな増加の要因はなく、予想発生量は平年並と考えます。</p>
果樹共通	カメムシ類	-	少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(御浜町:5月1日~10日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ25頭(平年516頭)と少、ツヤアオカメムシ51頭(平年1233頭)と少 (-)</p> <p>2) 予察灯(畑・松阪市:5月1日~15日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ2頭(平年109頭)と少、ツヤアオカメムシ0頭(平年10頭)と少 (-)</p> <p>3) フェロモントラップ(5月1日~5月16日)では、チャバネアオカメムシ誘殺数は、山地(津市白山町川口)で111頭(平年91頭)と多(+)、中間地(津市白山町二本木)で78頭(平年139頭)と少(-)、平坦地(松阪市嬉野川北町)で1頭(平年27頭)と少(-) (-)</p> <p>4) 巡回調査圃場(5月第2週、カンキツ圃場)では、飛来を未確認(平年0.3頭) (±)</p> <p>5) 一般圃場では、発生量はやや少 (-)</p> <p>考察： 現状の発生は少と思われ、大きな増加の要因はなく、予想発生量は少と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
チャ	炭疽病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(5月20日発表)によると、前半は天気が数日の周期で変わり、期間の後半は平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(5月第2週)では、新葉発病葉数は0枚/m²(過去8年平均0.2枚/m²)と平年並に少の傾向(±)、4月第2週での旧葉発病葉数は1.5枚/m²(6年平均2.9枚/m²)とやや少の傾向(-) (-)</p> <p>考察： 現状の発生はやや少と思われるが、今後の増加を考慮して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	もち病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(5月20日発表)によると、期間の後半は平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(5月第2週)では、発病葉数0枚/m²(平年0.0枚/m²)と平年並に少 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、前年10月中旬における発生はなし (-)</p> <p>考察： 現状の発生は平年並に少と考えられ、大きな増加要因はないので、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	カンザワハダニ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(5月20日発表)によると、期間の後半は平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(5月中旬)では、寄生葉率は10.0%(平年4.3%)と多、寄生頭数は0.19頭/葉(平年0.17頭/葉)と平年並 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(5月第2週)では、寄生葉率は0%(平年6.9%)と少、寄生頭数は0頭/葉(平年0.17頭/葉)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少 (-)</p> <p>考察： 現状の発生は少と考えますが、今後の増加を考慮して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	チャノホソガ	-	少	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃フェロモントラップ(4月第4半旬~5月第3半旬)では、誘殺数は56頭(平年182.7頭)と少 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(5月第2週)では、寄生葉率は0%(平年6.9%)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少 (-)</p> <p>考察： 現状の発生は少と思われ、大きな増加要因はないので、予想発生量は少と考えます。</p>
	チャノミドリヒメヨコバイ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃粘着吸引トラップ(4月第5半旬~5月第4半旬)では、捕殺数は3頭(平年6.0頭)と少 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(5月第2週)では、たたき落とし虫数は0.6頭(平年1.7頭)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量はやや少 (-)</p> <p>考察： 現状は一般圃場での発生を重視してやや少と思われ、大きな増加要因はないので、予想発生量はやや少と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
チャ	チャノキイロアザミウマ	-	少	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃粘着吸引トラップ(4月第5半旬~5月第4半旬)では、捕殺数は150頭(平年1821.3頭)と少 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(5月第2週)では、たたき落とし虫数は0.4頭(平年10.5頭)、発生圃場率は12.5%(平年59.8%)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや少 (-)</p> <p>考察： 現状の発生量は少と思われ、大きな増加要因はないので、予想発生量は少と考えます。</p>
イチゴ	うどんこ病	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(5月20日発表)によると、期間の後半は平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 一般圃場では、本圃の発生量は少で、親株床はやや少の傾向 (-)</p> <p>考察： 現状の発生は少と考えられますが、親株床での発生量を重視して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	炭疽病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(5月20日発表)によると、期間の後半は平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 一般圃場では、親株床で特に目立った発生はなし (±)</p> <p>考察： 現状は平年並に特に目立った発生はなく、予想発生量は平年並と考えます。</p>
ネギ	ネギコガ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(5月20日発表)によると、期間の後半は平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(4月第4半旬~5月第3半旬)では、誘殺数は27頭(平年124.3頭)と少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(5月第2週)では、被害葉率0%(平年0.1%)と平年並に少 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並に少 (-)</p> <p>考察： 現状の発生は平年並に少と考えられ、今後大きな増加要因がないため、予想発生量は平年並と考えます。</p>
野菜共通	コナガ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(5月20日発表)によると、期間の後半は平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(4月4半旬~5月3半旬)では、誘殺数は56頭(平年185.5頭)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少~平年並(概してやや少) (-)</p> <p>考察： 現状の発生はやや少と考えられ、今後大きな増加要因がないため、予想発生量はやや少と考えます。</p>

4. 予察項目の見方

1) 「作物別の状況」の見方

発生時期（平年比）： 平年の発生月日からの差を「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階評価で予測します。ただし、発生時期が毎年大きく変化する病害虫では、日数の基準が下記より大きくなります。発生時期を予察する意義の小さい病害虫では予察しません。

日数	-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	1	2	3	4	5	6
評価	早	やや早		平年並				やや遅		遅			

発生量（平年比）： 発生密度の平年値からの差を「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階評価で予測します。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

			平年値 ↓			
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少	やや少	平年並	やや多	多	

発生量（程度）： 発生程度を「小、中、大、甚」の4段階評価で予測します。評価の基準値は病害虫毎に異なりますが、大雑把には、「見た目の多さ・少なさ」です。甚になるほど見た目は多くなり、小になるほど見た目は少なくなります。「発生量（平年比）」と比べることによって、「平年並に発生程度が小さい」「発生程度は大きい平年並の発生量である」「平年より多いが、発生程度は小さい」「平年よ

りやや少ないが、依然として発生程度は中くらいである」等のように判断してください。

小	中	大	甚
---	---	---	---

要防除圃場率（平年比）： 防除の必要性の目安を「低、普通、高」の3段階評価で予測します。「普通」であれば、県下の大半の圃場では防除暦に沿った通常の防除をしていればよいと予想されます。「高」であれば、防除時期の見直しや追加防除などが必要な圃場の割合が相当増加すると予想されます。「低」であれば、防除回数を減らせるか防除しなくても済むような圃場の割合が相当増加すると予想されます。

低	普通	高
---	----	---

発生消長の一例： 発生予報は向こう1か月の予報ですが、その前後を合わせて40日ほどの病害虫の発生消長の一例をグラフで示します。大まかな目安として利用してください。

防除の注意事項： 向こう1か月の病害虫の特性と防除に関する説明です。

2) 「発生時期・発生量（平年日）の予察根拠」の見方

（±）：平年並の要因

（+）：発生量増加または発生時期遅延の要因

（-）：発生量減少または発生時期早期化の要因

5. 今月のトピックス 「水稲のニカメイガについて」

三重県内での被害の様子

ニカメイガの幼虫（図1）は、水稲の葉鞘や茎の内部を食害します。

分けつ期から出穂期までは、心枯れが発生します。また、出穂期以降には、出すくみ穂や白穂の発生によって、収量に影響を及ぼします（図2）。

三重県内での発生面積は、近年増加傾向にあります（図3）。被害程度の小さい圃場がほとんどですが、ごく一部では目立つ被害が発生しています（図2）。作付時期の多様化や冬期の温暖化は、ニカメイガの発生しやすい環境をつくると考えられており、今後注意が必要です。

終齢幼虫は体長20～23mm



図1 ニカメイガ幼虫
(農業研究所 鈴木賢氏原図)



図2 ニカメイガによる白穂被害の多発圃場

生活史

三重県では年2回発生します（図4）。

成虫（越冬世代）：4月から6月にかけて羽化、水稲に産卵。

幼虫（第1世代）：葉鞘や茎を食害（葉鞘の黄変・心枯れ）。

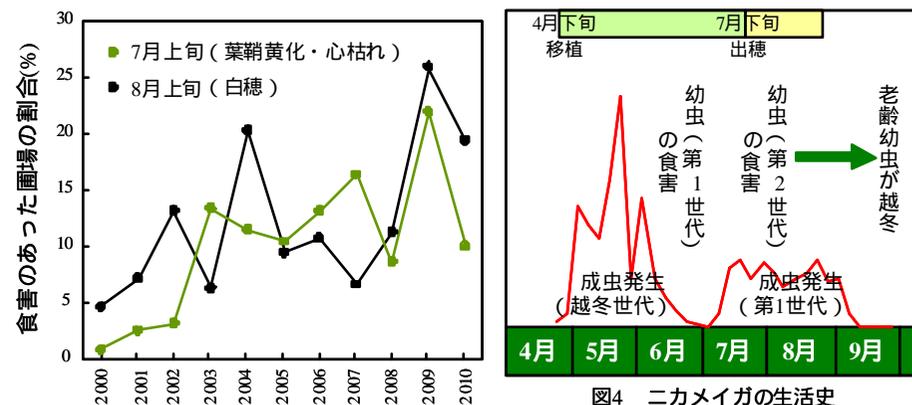


図3 過去10年における、ニカメイガ発生状況の推移 (巡回調査結果)

成虫（第1世代）：7月以降に羽化、産卵。

幼虫（第2世代）：茎を食害（出すくみ穂・白穂）。

老齢幼虫（第2世代）：水稲の刈り株や稲わらの茎内で越冬。

防除のポイント

ほとんどの圃場では薬剤防除の必要がありませんが、毎年被害が目立つ圃場では、防除を行いましょ。

1) 毎年発生の多い地域では、長期残効性の箱施用剤を利用して、幼虫（第1世代）の防除を重点的に行いましょう。

2) 6月から7月にかけて、心枯れが1割以上の株で発生した場合は、成虫（第1世代）の発生時期（平年7月第6半旬・松阪市）に合わせて薬剤散布しましょう。

3) 冬場の耕起管理によって、越冬源となる稲わらをすき込みましょう。

6. 気象のデータ

東海地方 1 か月予報 (平成 23 年 5 月 20 日 名古屋地方気象台発表)

東海地方の向こう 1 か月は、期間の前半は、天気は数日の周期で変わって
しょう。後半は、平年と同様に気圧の谷や前線の影響で曇りや雨の日が多い
見込みです。

1 週目 5 月 21 日 ~ 27 日	期間の中頃に高気圧に覆われて晴れる日 がありますが、気圧の谷の影響で雲が広が りやすく、はじめと終わりには雨の降る日 があるでしょう。	津の降水日数・晴 れ日数の平年値 2.1 日・4.1 日
2 週目 5 月 28 日 ~ 6 月 3 日	天気は数日の周期で変わってしょう。	同 1.9 日・4.1 日
3~4 週目 6 月 4 日 ~ 6 月 17 日	平年と同様に、気圧の谷や前線の影響で曇 りや雨の日が多いでしょう。	同 4.8 日・6.7 日

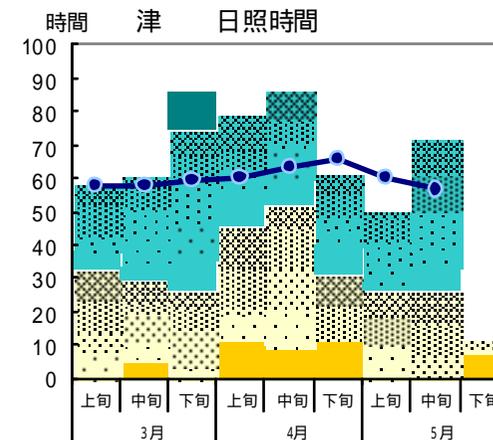
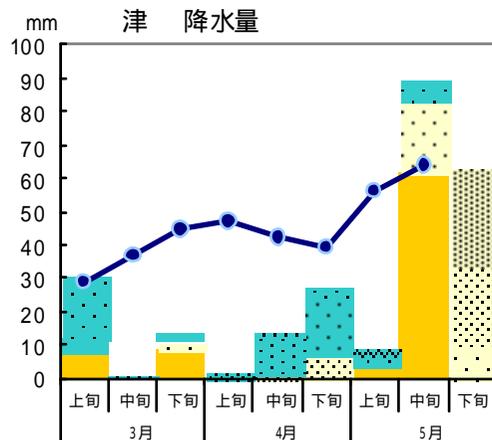
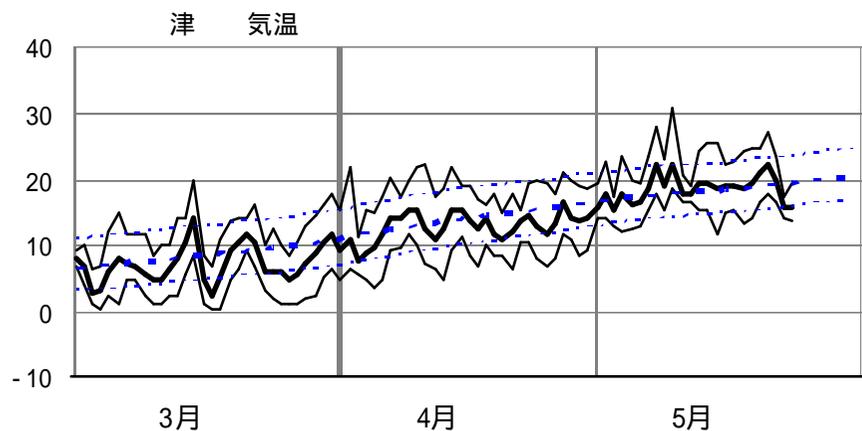
東海地方週間天気予報 (平成 23 年 5 月 25 日 10 時 40 分 名古屋地方気象台
発表)

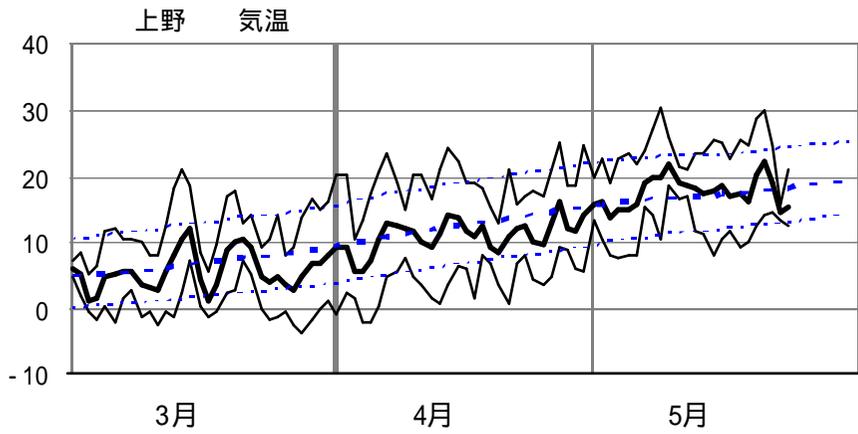
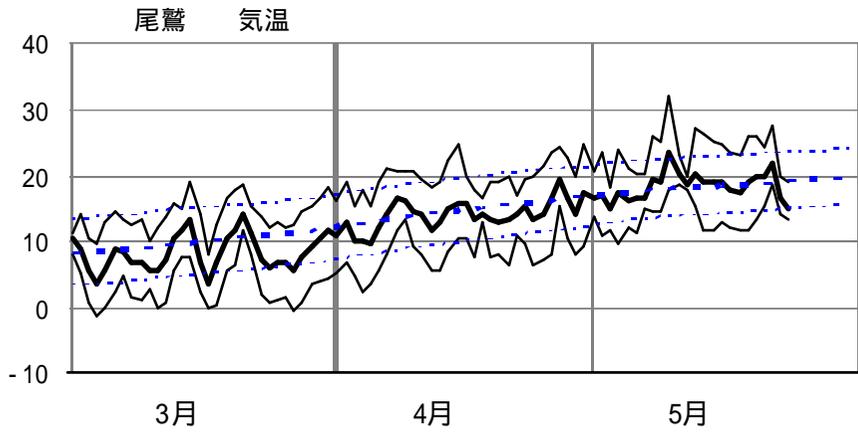
予報期間 5 月 26 日 ~ 6 月 1 日

向こう一週間は、気圧の谷や前線の影響で雲が広がりやすく、雨の降る日
が多いでしょう。

最高気温と最低気温はともに、平年並か平年より低い見込みです。
降水量は平年より多いでしょう。

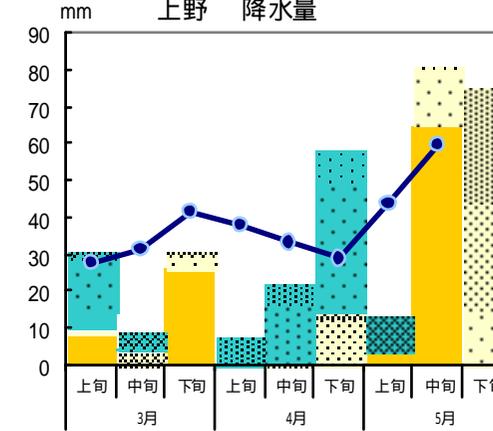
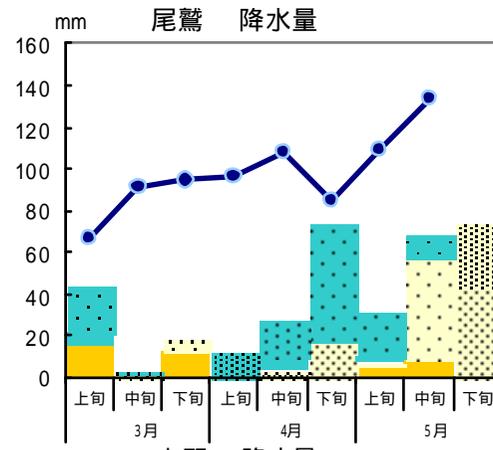
気象の日別推移 (気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etm/index.php> から作成、**平年値が変更されました**) (5 月 24 日まで)





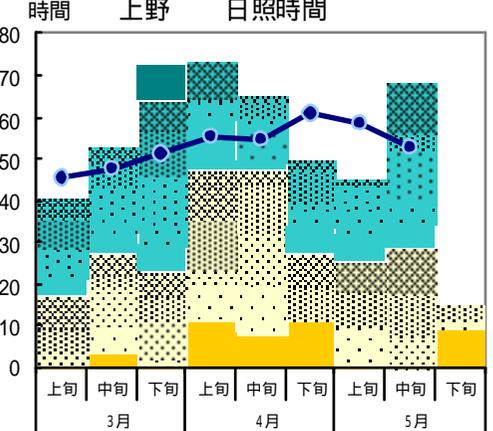
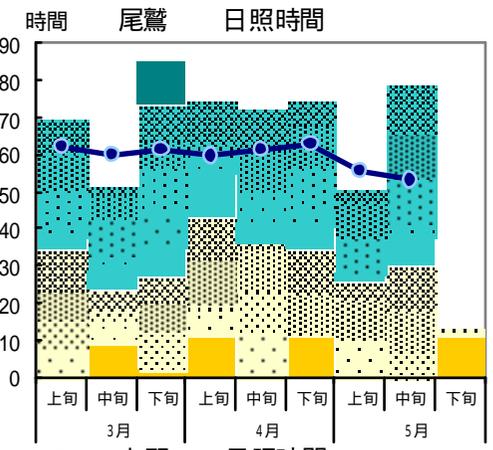
凡例

- 平均
- 最高
- 最低
- 平年 平均
- 平年 最高
- 平年 最低



凡例

- 31日
- 旬10日目
- 旬9日目
- 旬8日目
- 旬7日目
- 旬6日目
- 旬5日目
- 旬4日目
- 旬3日目
- 旬2日目
- 旬1日目
- 旬平年値



凡例

- 31日
- 旬10日目
- 旬9日目
- 旬8日目
- 旬7日目
- 旬6日目
- 旬5日目
- 旬4日目
- 旬3日目
- 旬2日目
- 旬1日目
- 旬平年値

7. おしらせ (前回と異なる項目には **NEW** の印があります)

1) 記載基準の注意点

平年ほとんど発生のないか非常に少ない病害虫については、平年並に少ない発生状態の「発生量平年比」を「平年並」、「発生量程度」を「小」と記述しています。

2) 発表日 **NEW**

本年度の病害虫発生予報は次の予定で発表します。

- 第1回 4月21日(済み) 第2回 5月26日(今回)
- 第3回 6月23日(木) 第4回 7月21日(木)
- 第5回 8月18日(木) 第6回 10月20日(木)
- 第7回 3月22日(木)

3) 利用方法

全部または一部をコピーして回覧・配布にご利用ください。ただし必ずページの右下にある「三重県病害虫防除所」の文字が入るようにしてください。

病害虫防除所ホームページには、この予報をはじめとして、不定期に発表される警報、注意報、特殊報、技術情報や、各種のグラフ、写真も載っています。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo/>

このホームページはフリーリンクです。リンクする場合、事前の承諾申請等は不要ですが、事後で結構ですのでメールにてご一報いただくと幸いです。

4) 本冊子の利用の手引き書

本冊子の見方を説明した「病害虫発生予報利用の手引き」があります。下記のアドレスからお入りください。

http://www.mate.pref.mie.lg.jp/Bojyosyo/files/h23yohotebiki_.pdf

5) メール配信サービス

予報、警報、注意報、特殊報、技術情報が発表されたときに、ホームページに掲載されたという「掲載通知」を電子メールでお知らせしています。このメールの配信を希望される方は、下記のアドレスからお申し込みください。

<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo/merumaga.htm>

6) 農薬登録状況の最新情報

農薬の販売や使用に当たっては、農薬登録上の制限があります。農薬の使用時はラベルをよく読んでください。次のインターネットサイトでは、最新の農薬登録状況が確認できます。

独立行政法人農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報提供システム」

http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm

7) 気象データの平年値 **NEW**

気象データの平年値が5月18日に更新され、1981年～2010年の30年間の平均値に変わりました。今回の変更により、全国的に平均気温が0.2～0.4程度高くなりました。